

研究資料

英国王立キュー植物園における
「日本の伝統的庭園技術を用いた今日的庭園展示」
の経緯とその意義

関西剛康

造園計画研究室

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

**Processes and meanings of "The Japanese Showcase Gardens Project
'Past Traditions, Tomorrow's Designs' "
in Royal Botani Gardens Kew in the UK**

Takayasu Sekinishi

*Laboratory of Landscape Planning and Design, Department of Environmental Horticulture,
Minamikyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan*

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

南九州大学研究報告 40A 別刷

Reprinted from

BULLETIN OF MINAMIKYUSHU UNIVERSITY
40A, 2010

研究資料

英国王立キュー植物園における 「日本の伝統的庭園技術を用いた今日的庭園展示」 の経緯とその意義

関西剛康

造園計画研究室

2009年10月7日受付; 2010年1月27日受理

Processes and meanings of "The Japanese Showcase Gardens Project
'Past Traditions, Tomorrow's Designs' "
in Royal Botani Gardens Kew in the UK

Takayasu Sekinishi

Laboratory of Landscape Planning and Design, Department of Environmental Horticulture,
Minamikyushu University, Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japan

Received October 7, 2009; Accepted January 27, 2010

During approximately about 1 year since May 19, 2001, a lot of events for "Japan 2001" were held in the UK to introduce Japanese culture. As one of such events, the Royal Botanic Gardens Kew displayed 6 gardens titled "The Japanese Showcase Gardens Project 'Past Traditions, Tomorrow's Designs' ", to introduce traditional Japanese garden arts in a modern manner to the public for about 4 months from May 25 to Sep. 30, 2001.

The author was one of the 6 dispatched designers of the displayed gardens and engaged in the setting of a theme, designing, construction, supervision, and completion of gardens. In this paper, the author delved into the detail of this project until completion, especially the garden the author designed and its meanings. As a result, it was found that the 6 designers designed the 6 gardens while utilizing the traditional techniques of Japanese gardens but not sticking to the traditional Japanese garden styles, so that contemporary English citizens can understand them. The designers re-created and proposed traditional Japanese garden techniques while considering the harmony with English environments, life, and culture.

Keywords: Japanese garden, displayed garden, Royal Botanic Gardens Kew, traditional techniques.

1. はじめに

平成13(2001)年5月19, 20両日, ロンドンのハイド・パークでの20万人余が参加した「祭り」を皮切りに, 全英で日本文化紹介事業「英国における日本年 Japan 2001」¹⁾の多数の催しが, 平成14(2002)年3月まで開催された. この5月20日には, 本事業の名誉総裁であられる日英両皇太子殿下も親しく参加者の中に入れられ, この事業の柱でもある「見る文化」と「参加する交流」を体験しておられた.

そして, この事業の一環として, 王立キュー植物園

(Royal Botanic Gardens, Kew: 以下RBG Kew)²⁾では, その主要な催しとして, 日本の社団法人ランドスケープコンサルタンツ協会(以下CLA)との共催で, 「日本の伝統的庭園技術を用いた今日的庭園展示 "Past Traditions, Tomorrow's Designs" (伝統技術にみる新たな庭園デザイン)」³⁾と題した6つの日本式の庭園を, 平成13(2001)年5月25日から9月末日までの4ヵ月余の間RBG Kew園内に展示を行い, 一般にも公開された.

本論は, この展示庭園を手掛けた派遣デザイナー6人中の1人として, そのテーマ・デザイン・設計・設計監理から完成に至るまでを担当した立場から, 6つの展示庭園を対象に, 中でも自身の担当した展示庭園は

表1. 展示庭園完成に至るまでの経緯

年 月	概 要
平成12 (2000) 年 11月下旬	CLAが6名の派遣デザイナーの募集を開始する。
平成12 (2000) 年 12月 6日	派遣デザイナーの募集が締め切られる。
平成12 (2000) 年 12月27日	選考により派遣デザイナー6名が決定する。
平成13 (2001) 年 1月15日	RBG Kewスタッフが来日し、東京で事前の概要説明会が行われる。
平成13 (2001) 年 3月20日	CLAに各派遣デザイナーが展示庭園の基本設計図を提出する。
平成13 (2001) 年 5月上・中旬	6名の各派遣デザイナーが渡英し、RBG Kewで庭園施工、設計監理が始まる。
平成13 (2001) 年 5月23日	6サイトすべての展示庭園が完成する。
平成13 (2001) 年 5月24日	本事業の名誉総裁であられる日本の皇太子殿下が行啓訪問なされる。
平成13 (2001) 年 5月25日	完成した展示庭園の一般公開が始まる。
平成13 (2001) 年 9月30日	約4ヵ月余にわたる庭園の展示期間が終了する。

表2. 展示庭園を担当した派遣デザイナー

サイト	規 模	氏 名	所 属 (役 職)	地 域	性 別	年 齢
No.1	15m×11m=165m	中島 寛久	株式会社 総合庭園研究室 (取締役)	関東	男	50歳
No.2	7m× 5m= 35m	古家 英俊	有限会社 デザインネットワーク (取締役)	九州	男	50歳
No.3	7m× 5m= 35m	三浦 景樹	株式会社 飯沼コンサルタント (常務取締役)	中部	男	50歳
No.4	7m× 5m= 35m	荒川 淳良	岩城造園 株式会社 (設計部課長)	関東	男	36歳
No.5	15m×11m=165m	関西 剛康	株式会社 中根庭園研究所 (企画・設計主任)	関西	男	36歳
No.6	7m× 5m= 35m	椎名 和美	株式会社 東京ランドスケープ研究室 (設計部長)	関東	男	51歳

平成12 (2000) 年12月27日当時

詳細に、この事業の完成までの経緯を詳細に辿るとともに、その意義について考察を行った。

2. 「日本の伝統的庭園技術を用いた今日的庭園展示」完成に至るまでの経緯

経緯については、派遣デザイナーの募集から展示庭園の完成に至るまでを表1に取りまとめた。

(1) 今日的庭園展示の趣旨

明治6 (1873) 年のウィーン万国博覧会で、最初に日本庭園が海外で造られて以来、海外において文化交流を目的に、国際園芸博覧会の催しの場や友好都市等に多くの日本庭園が造られ、伝統的なその姿を通して日本文化の紹介がなされてきた。しかし、これらの日本庭園は完成された空間として、単一様式としての様式美を伝えるには充分であったが、日本庭園の多様性を表現し、また展示された国の現代生活に応用できる個々の技法や、その根底に流れる思想を端的に提供する観点には不足気味であった⁴⁾。

本事業ではこの点に着目し、世界的に日本庭園の関心が高まっている最中、特に欧州では注目となっている日本の伝統的庭園技術の粋を、ハイレベルなRBG Kewの関係者ならびに来客者に対して、庭園施工の段階から一般公開し、日本の伝統的な庭園の様式美に固執することなく、英国の一般家庭 (イングリッシュガーデン) にも応用できる日本の伝統的な庭園技術や

手法を駆使した姿を提供しようとするものであった。これにより一般の英国人に日本庭園の根底に流れる「自然と共生する思想」に触れてもらうことで、日本文化への真の理解を深めることを目的とした。

(2) 基本設計について

派遣デザイナー6名は、CLAの会員約3000名を対象に希望者を募り、書類審査からプロポーザル方式⁵⁾により選定された (表2)。選定された派遣デザイナーの多くは、海外での業務経験が豊富であった。

1) デザイン・設計における諸条件

初期の設計条件として、①豪華絢爛で短期的なフラワーショーの展示ではなく、数ヵ月にわたり「本当の庭」として季節を感じ、植物が成長する過程を通してその空間と時間を感じられる展示であること、②展示庭園の規模は、RBG Kewへの訪問客へ「日本の庭園デザインと材料を英国の個人庭園にも応用できる」ことに気づいてもらうために、英国内の一般的な「都市住宅」と「郊外住宅」の庭園 (タウンガーデン) と同規模とすること、③施工費用も同様に標準的な予算額 (材料費は「都市住宅」の庭園で£5,000 (約85万円)、[「郊外住宅」の庭園で£10,000 (約170万円)]) とすること、④原則として英国内で一般市民が容易に調達できるものを材料として使用すること等⁶⁾ といった提示がされた。

また次に計画サイトの詳細な環境条件として、①土壌は地表から約1.0mが砂質ローム層で、その下層は川砂と砂利で排水は良好であり、pH6.0の弱酸性である

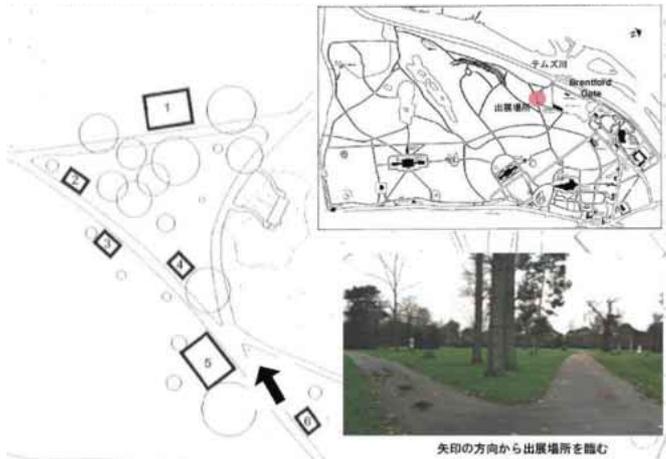


図1. RBG Kew園内における展示庭園の位置図

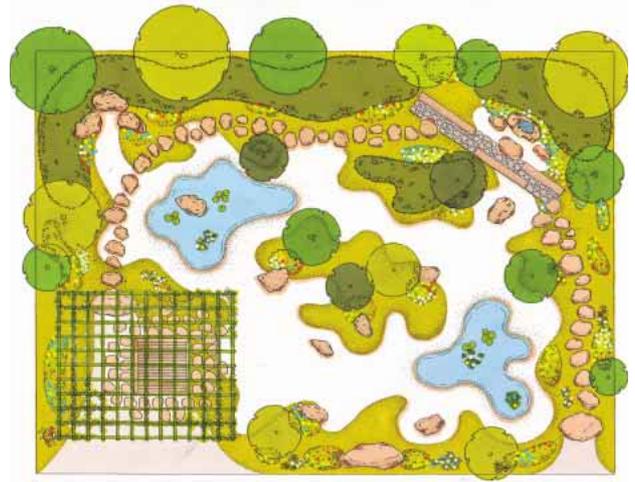


図2. サイトNo.5の基本計画平面図



写真1. サイトNo.5の施工前

こと、②気温は夏期最高気温が30.2℃、冬季最低気温が-5.5℃であり、夏期の気候が日本の東北地方の気候と類似していること、③また展示期間の雨量は、植物の良好な状態に維持するのに十分な雨量であり、灌水も行われるが、夏期は慢性的な水不足により取水制限があるため、全ての計画サイトに毎日灌水することは困難であること、④設計上、給水（散水用）と電気が必要であれば、サイトごとに灌水用の水栓や13Aのコンセントを各1つずつ用意できること、⑤計画サイト内の排水は良好であるため、特に排水施設は設けないこと等であった。

そして具体的な敷地条件として、RBG Kew園内北部のBrentford Gate付近の穏やかな芝生広場内に、6つの展示庭園サイトを設置した。この中で4つのサイト（サイトNo.2, 3, 4, 6）は、現在英国の2棟連結式タウンハウス型住宅の前庭を代表とする「タウンガーデン（幅7m×奥行5m=35m²）」を、残り2つのサイト（サイトNo.1, 5）は「郊外型住宅庭園（幅15m×奥行11m=165m²）」を想定した計画地を提供してきた（図1, 写真1）。

これらの諸条件と催しの趣旨をもとに、選定された派遣デザイナー6名は全国各地で、担当するサイトの庭園テーマとそのデザインや施設詳細図等の作成に取

り掛かり、RBG Kewや英国の施工業者側に十分理解される基本設計図を、CLA側に平成13（2001）年3月20日までに提出し、またRBG Kew側にもE-mailを利用して直接送信した。この基本設計図をもとに、各派遣デザイナーが渡英する前に詳細なやり取りに関してもE-mailで指示を行ったうえで、英国側において事前の積算、基盤整備、材料調達、工程等が施された（図2）。

2) 展園テーマの設定

各派遣デザイナーが設定した庭園テーマやデザインは、催しの趣旨である「自然と共生する思想」を反映した内容となっていた（表3）。各庭園のテーマには「調和」、「融合」、「統合」といった言葉が使用されており、その対象は「自然」であり、または「対極にある概念（拡散性と求心性）」や「リズムと調和」、「自然と人工」、「日英の文化融合」であった。派遣デザイナーが捉えた一般の英国人に活用できるような日本庭園のテーマ的特徴がよく表れている。著者の提案したサイトNo.5の庭園テーマの内容も、相反する2つの要素である「自然と人工の美の融合」させようとする試みであった。

ここから読み取れることとして各派遣デザイナーは、基本的に2つの概念の「調和」や「融合」を提唱しているところに、日本庭園の根底に流れる日本文化の「共生」の概念（思想性）が窺われるものと考察する（表4）。

3) デザイン・設計の構築

各派遣デザイナーが「自然との共生する思想」をテーマに、現代の英国に具体的に展示しようとした日本庭園の特徴的な手法や技法としては、「縮景」、「見え隠れ」、「見立て」、「坪庭」、「茶庭」等であった。しかし、ここでは伝統的な日本庭園の技法をそのまま展示するのではなく、ここでも「共生」や「調和」、「融合」等をテーマに現代の英国で活用してもらおうと考えたデザインとなっていた（表5）。

例えばサイトNo.1は、縮景庭園様式を用いながらもシンプルな「生花的植栽」の明るいイメージとすることで一般的な英国庭園にも現代的に調和するような植栽手法を試みている（写真2, 3）。またサイトNo.2は、「見え隠れ」の手法を現代的な素材であるアクリルパ

表3. 6つの展示庭園のテーマ

計画地	庭園テーマ
サイトNo.1	自然を無理なく調和し、醸し出す雰囲気味わえる庭園を展示する。日本庭園の伝統的な技法である「縮景」の技法を用い、庭園内に山、樹林、野原とそれぞれをつなぐ流れを設ける。それぞれの要素が醸し出す雰囲気から自然の調和、日本人の好む感性のひとつである「風情」が感じられる空間を創出する。自然との共生を根本的な思想とする日本庭園の基本はそのままに、個々の添景物にとらわれずに日本的な雰囲気「風情」を表現する。また英国の樹木、植物を用いたシンプルな生花的植栽により日本的でありながら英国でも調和する現代的で明るい空間を創出する。
サイトNo.2	庭園全体に砂利を敷き込み、その中に半球状のマウンドを設ける。このマウンドは外へ広がる拡散性と核への求心性を見るものに与え、この両者バランスが日本の思想のひとつである「あ」「うん」を表現している。「あ」「うん」は対極にある概念を統合させる伝統的な思想であり、今日の環境をはじめとするさまざまな問題を解決する視点を提示している。また、日本の伝統的な庭園技術である「見え隠れ」「見立て」を取り入れ、小さな空間でも大きさを感じさせる工夫をしている。この手法は、一点からすべてを見渡せないようにすることにより隠れた部分に無限の空間を想像させるものである。この技法を使用することにより、「あ」「うん」の思想はより一層広がりのある空間を創り出してくれる。マウンドに植えた松は、人の管理と自然の摂理の統合を体現するもの。竹林に「見立て」たアクリル樹脂の列柱は、視覚的な透明と物理的な分断という対立概念の共存を示している。
サイトNo.3	日本庭園の根底にある「自然との共生」を継承し、かつ今日的な課題である「循環型の環境」の創出をテーマとする。具体的には、建設廃材（レンガ等）や、産地で廃材として処理される石材（端物等）を積極的に活用する。また英国、ロンドンが抱える夏場の慢性的な水不足にも対応できる灌漑用雨水貯留システムの導入も考える。庭園の空間構成としては、「密と疎」、「日向と日陰」の空間を創出し、それぞれを緩やかな曲線の枯山水、コケの植栽地をつなぎ、それらが織りなすコントラストを楽しむことができる空間とする。
サイトNo.4	拡散するスモールガーデン「坪庭」=リズムと調和=Spread Small Garden TSUBONIWA=Rhythm And Harmony 日本伝統的な「坪庭」の空間は、その中に小宇宙を持っている。観る者は、「坪庭」の縮められた景色の中に、求心的なエネルギーを感じることができる。今回、キューガーデンに造る庭は、伝統的な坪庭とは逆に、拡散する庭である。芝生の中に切り取られた「坪庭」は、周囲の風景を取り込みながら、空間に日本的な秩序を与え、遠心的なエネルギーを拡散する。庭の素材には、「能」や「茶道」のなかに見ることができる、日本固有のリズムが与えられ、不規則な中に調和した風景を創り出す。「透ける」see-through、「不規則」irregularity、「開きながら閉じる」open and shutなどの「坪庭」の要素は、自然を生かした英国式庭園に通じるものがあるはずである。
サイトNo.5	日本庭園の特徴のひとつである、「自然と人工の融合」をテーマに自然的要素と人工的要素の連携が調和の美を醸す庭園を展示する。このプランでは、住宅に見立てた藤棚を庭園の核とし、そこを中心に庭園を展開する。庭園自体は周辺を散策できるようにし、狭い庭園でも見え隠れの技術を用いて実際の空間より広く見せる。庭園を「座観の池庭（静的）」と「散策の庭（動的）」のゾーンとして区別し、「座観の池庭」には枯滝・池・築山などを表現し、「散策の庭」には延段・飛石・蹲踞を配して、歩くこと・観ることの楽しさを表現する。調和のある全体構成が日本庭園の特徴であるため、時代に調和し、庭園要素の相互関係から生まれる美を壊すことなく、心静かに観賞・散策する空間を形成する。
サイトNo.6	日本と英国の「茶」の文化と「庭」の文化の繋がりとその文化の融合を表現した庭園。それぞれの国のそれぞれの様式を融合した新しいもてなしの場を創出する。具体的には、英国風のテラスガーデンを中心に置き、そのテラスガーデンに導くまでの空間に「蹲踞」等の日本の「茶庭」（ティー・セレモニー・ガーデン）の空間を配置する。この空間は、単に鑑賞するための空間ではなく、そこで行われる人々の日常的な楽しみ「ティータイム」を演出するための庭であり、そこかしこに日本的なもてなしの心を表現する。

表4. 各庭園テーマ等の抽出

計画地	主なテーマ	イメージ・キーワード
サイトNo.1	自然を無理なく調和し、醸し出す雰囲気味わえる庭園	風情、現代的で明るい空間
サイトNo.2	対極にある概念の統合（対立概念の共存）	「あ」「うん」、（拡散性と求心性）、対極にある概念の統合、小さな空間でも大きさを感じさせる
サイトNo.3	自然との共生、循環型の環境	密と疎、日向と日陰
サイトNo.4	不規則な中にも調和した風景	リズムと調和、拡散する庭（「透ける」「不規則」「開きながら閉じる」）
サイトNo.5	自然と人工の融合（自然的要素と人工的要素の調和美）	心静かに観賞・散策する空間
サイトNo.6	日英の「茶」と「庭」の文化の融合	新しいもてなしの場

表5. 各庭園の技法・手法等の抽出

計画地	技法・手法	庭園意匠の特徴
サイトNo.1	縮景, 山・樹林・野原とそれぞれをつなぐ流れ 生花的植栽	築山, 滝, 流れ, 池, 八つ橋, 人工竹垣フェンス
サイトNo.2	見え隠れ, 見立て	マウンド (富士山状), 列柱 (アクリル樹脂製, 竹), 白砂, 松, コクリユウ
サイトNo.3	灌用水用雨水貯留システム	レンガ・石材 (廃材再利用), コケ, 枯木
サイトNo.4	坪庭	四つ目垣, 延段, 景石, 蹲踞, 白砂
サイトNo.5	座観の池庭 (静的), 散策の庭 (動的) 見え隠れ, 回遊式	景石, 枯滝, 白砂, 池, 延段, 蹲踞, 石橋, 藤棚, 縁台, 霰零し
サイトNo.6	茶庭, テラスガーデン	舗地, ゲート (簾, 暖簾), テーブル, ベンチ, 築山枯滝

表6. サイトNo.5の庭園テーマの詳細な方針

「動と静」	この庭園の構成は、「静かに観賞する庭園」と「散策しながら楽しむ庭園」が共存することになった。静かに観賞するため庭園の拠点としての縁台と藤棚を庭園の添景としても設け、そこから庭園全体を静かに観賞できる場とした。また、庭園を飛石伝いに歩き、近づいて草花を見て、匂い、又は触ってみる楽しさも演出した。日本の茶庭の空間構成にみられるように、狭い敷地でも、見え隠れの技術を応用することで、実際の空間より広く見せた。周辺には景石・池・延段・蹲踞を配して、歩くこと・観ることの楽しみの向上を図る装置を周辺に配置した。これらは飛石同様、自然素材を使用していることで、落ち着いた観賞の庭としての調和も崩さないものと考えた。
「伝統と現代」	庭園自体は、基本的に枯山水を模した池泉式とした。枯山水は本来、実際の水を用いないで「水」を創造させる日本古来の庭園技法である。また本来の枯山水の意味は、禅宗芸術による自然崇拜の思想の象徴として表現されたものであった。しかし、ここでは枯山水のもつ美的構成を用いて、現代に生きた庭園として再構築した。つまり、英国における水彩画のように、白砂が水彩画のキャンパス自体であり、そこに色彩豊かな絵の具のかわりに花々や草木を植え、これによって、新たな庭園美の表現が出来るものと考えた。
「東洋と西洋」	日本庭園と英国庭園の調和は、現代の英国の方々が実際に親しんでいる植栽と日本庭園に用いられる植栽を折衷したものとする。これらは、白・青・黄色の色調の草花を中心に、モミジやシャラノキを植栽し、英国の一般家庭でも、実際の生活に潤いと楽しみが得られるように考えた。

イブを竹林のように「見立て」た表現とすることでモダニズムな解釈としており、コンテンポラリーアートの領域までそのデザインを昇華させている (写真4)。サイトNo.3は、現在の問題である資源の再利用と水循環のエコシステムとして庭園をデザインすることで自然との共生を現代的に解釈しており、枯木に美を見出した「わび」「さび」を表現しようとしている (写真5)。サイトNo.4は、英国人にも理解できるように伝統的な坪庭を再解釈してデザインした庭園を表現し (写真6)、同様にサイトNo.6は、英国と日本の茶庭をモチーフにその庭園文化を再解釈してデザインしていた (写真7)。

このように、今までの日本の庭園様式の技法をそのまま展示するのではなく、ここでも「共生」や「調和」、「融合」等をテーマに、現在での英国でも一般的に活用でき、受容しやすいデザインを展示しようとした。

著者もサイトNo.5の庭園テーマを基に伝統技術を再

構築した庭園デザインを試みている (表6, 写真8, 9)。さらに庭園テーマの詳細な方針としては、「動と静」、「伝統と現代」、「東洋と西洋」の3つのサブテーマを設定した。例えば「動と静」のデザインとしては、「静かに観賞する庭園」と「散策しながら楽しむ庭園」の共存性を表現し、それを基本的な庭園構成とした。庭園には心静かに観賞するための視点場としての縁台と藤棚それに座禅石を庭園の添景としても設け、そこから庭園全体を静かに観賞できる座観の場を形成した。また広いサイト内を飛石伝いに回遊し、近づいて植栽を観賞し、匂い、または触ってみる楽しさも演出した回遊式の動線を設定した。そして日本の茶庭の空間構成にみられるように、狭い敷地でも樹木越しに「見え隠れ」する技法を応用することで、実際の空間より広く見せるよう構成していた。周辺には景石・池 (枯池)・延段・蹲踞を配して、歩くこと・観ることの楽しみの向上を図る装置を回遊路周辺に配置した。これ



写真2. サイトNo.1の全景



写真6. サイトNo.4の全景



写真3. サイトNo.1の「生花的植栽」



写真7. サイトNo.6の全景



写真4. サイトNo.2の全景



写真8. サイトNo.5の全景



写真5. サイトNo.3の全景



写真9. サイトNo.5の「飛石」

らは飛石同様、自然素材を使用していることで、落ち着いた観賞の庭としての調和も崩さないものとして考えた。

また「伝統と現代」のデザインとしては、基本的に枯山水様式を模した池泉回遊式として表現した。枯山水様式は本来、実際には水を用いないで「水」を創造させる日本古来の庭園技法である。また本来の枯山水の意味は、禅宗芸術による自然崇拜の思想の象徴として表現されたものであった⁷⁾。しかし、ここでは枯山水のもつ美的な構成を用いて、現代の英国に活かせる庭園として再構築した。つまり、英国の伝統における水彩画のように、白砂を水彩画の白色のキャンパス自体と見立て、そこに色彩豊かな絵の具のかわりに花の彩りある地被類や低木を植栽することで日英文化の融合した新たな庭園美の表現が出来るものと考えた。

そして「東洋と西洋」のデザインとしては、日英両庭園の調和を、現代の英国人が実際に親しんでいる植栽と日本庭園に用いられる植栽を調和したものとした。これら植栽は、寒色系の白・青・黄色の色調の草花を中心に、中木にノムラモミジやシヤラノキ類を植栽し、英国の一般家庭でも、実際の生活に潤いと楽しみが得られるように考えた。この植物選定に関しては、英国園芸協会が出版している英国でよく使用されている植栽を掲載した辞典⁸⁾や英国で出版されている品種名まで世界共通の名称を用いて特定できる植物検索図鑑(プラント・ファインダー：CD-ROM版)等を利用して選択した(表7)。

(3) 設計監理と庭園施工

庭園施工は、世界で最も権威と歴史のあるチュルシー・フラワーショーでも造園施工を手掛けているランドマーク社が6庭園すべての造園施工を担当した。ガーデナーの意識は高く、日頃は目にするものがない英国庭園とは違う方法での施工に対して興味を示していた。

1) 設計監理

この英国での各サイトの設計監理は、各派遣デザイナーが描いた設計図を基に、日本庭園の伝統技術を理解していない英国人ガーデナーを相手に地割・造成・石組・施設・植栽・仕上げ等の作業指示を行った。さらにイメージ通りの庭園として精度を上げるために、現場に搬入される景石や植栽・施設等の各庭園材料の確認から、景石の配石や植栽の配植まで各ガーデナーの理解度と技術力を勘案しながら、工期内に完成するよう詳細に指示を行わなければならなかった。

このような海外における日本庭園の施工作業の場合は、作業内容や工程を現地ガーデナーが理解できないことで、作業が滞ることが多く、順調に作業を進めるために、コミュニケーションを密にすることが成功の秘訣となる。そこで英国側の現場監督者、RBG Kewスタッフと日本側の派遣デザイナーとの連携が特に重要となった。今回は途中、施工の遅れが発生しても、速やかに3者による協力体制を図り、協議を重ね、改善策をたてて対処した。

ちなみに施工現場に搬入された手水鉢や石臼等は、日本国内と同様にイメージしていた添景物として利用

可能であった。同様に竹垣についても、欧州には日本製の合成樹脂の二次製品のキットが輸出されており、簡単に庭園に利用することが出来た。また石材資材である飛石、延段に使用する切石や白砂等についても特に問題はなかったが、景石については後述するが多少の問題点があった。

2) 石組施工

今回の施工に関しては、事前に材料確認をする時間と費用はなかったため、事前に送った設計図とE-mailによる確認作業のみで材料発注することとなっていた。本来、日本庭園の特徴として素材を活かした施工を行う点がある。そのため予算枠があるにせよ、その材料の善し悪しが庭園の完成度を左右することとなる。本庭園施工においての石材材料の問題点は、景石として据える野面石に運搬中と荷降ろしの衝撃と考えられる割れがあったため、石組を行う際に据え方を制限されることとなり、石組の完成精度に不安が生じた。

また実際の石組施工に関しては、庭園文化の相違が顕わになった。英国には石積文化はあっても石組文化がないため、英国での景石(野面石)を用いた石組作業は現地のガーデナーにとっては初体験となった。まず石組を行うための道具である玉掛け用のワイヤーが存在しない(そのため派遣デザイナーの中には事前に空輸までして、そのワイヤーを持参するものまでいた)。著者の場合は、ワイヤーにも応用できそうな布製バンドを現地で代用した(ただし、耐久性に問題があった)。また現地のガーデナーが景石の玉掛けが出来ないため、それを指導しながら作業に当たった。玉掛けは石組作業の基本であり、特に日本庭園の特徴的なところであるが、異文化となる日本庭園の作業は出来るはずもなく、海外のガーデナーや作業員と共に作業をする場合によく起こることである。しかし、ある程度の指導を行うとすぐに英国のガーデナーでも出来るようになっていた(写真10)。

この様に伝統的な日本庭園の技術を英国人に説明できる知識、教養にデザイン力が必要とされ、またそれを作庭できる技術力の伝授も必要とされた。今回の各庭園でも、各派遣デザイナーは男結びや延段の山目地等、細かな伝統技術を各庭園で披露することができた。

3) 植栽施工

英国での植栽の多様さは素晴らしいものであり、モミジやアオキなど多くの樹種が、すでに英国庭園には定着している。ドイツやオランダのナーサリーが、一般の庭園樹木だけでなく、盆栽まで日本に買い付けに来て、欧州を中心に売買しているように、日本の植栽は多く欧州に伝わり、品種改良され、一般の庭園に普及している。

本施工においても植栽計画のリストに掲載した植栽はすべて入手可能であった(写真11)。植栽材料を確認した上で、植栽計画に基づいた配植を行っていくが、植栽の枝振りや生育度合等に応じて、現場で一木一草まで指示して配植を行う中で、適宜理想的な景観となるよう設計変更しながら施工した。また芝生においては、ロール状のものを使用し、特に著者等は、枯池と接するラインのエッジが美しく見えるように、緩やかにならないように土手を立ち上げてエッジを効かせて芝生を張った。

表7. サイトNo.5の植栽計画リスト

種別	科名	学名	和名
Trees	カエデ科	<i>Acer japonicum</i> 'Vitifolium'	ハウチワカエデ
Trees	カエデ科	<i>Acer palmatum</i> 'Bloodgood'	イロハモミジ
Trees	カエデ科	<i>Acer palmatum</i> 'Sango-kaku'	イロハモミジ「さんごかく」
Trees	カエデ科	<i>Acer palmatum</i> var. <i>coreanum</i>	
Trees	カエデ科	<i>Acer palmatum</i> var. <i>heptalobum</i>	
Trees	カエデ科	<i>Acer shirasawanum</i> 'Aurem'	ハウチワカエデ
Trees	ダヴィディア科	<i>Davidia involucrata</i>	
Trees	ツバキ科	<i>Stewartia pseudocamellia</i>	ナツツバキ
Shrubs	クロウメモドキ科	<i>Ceanothus thyrsiflorus</i> var. <i>repens</i>	
Shrubs	ハンニチバナ科	<i>Cistus</i> × <i>cypricus</i>	
Shrubs	ヒルガオ科	<i>Convolvulus cneorum</i>	
Shrubs	オトギリソウ科	<i>Hypericum olympicum</i> f. <i>uniflorum</i> 'Citrinum'	
Shrubs	クマツヅラ科	<i>Lantana monteridensis</i>	コバノランタナ
Shrubs	シソ科	<i>Lavandula</i> 'Hidcote'	ラベンダー
Shrubs	シソ科	<i>Lavandula stoechas</i>	ラベンダー
Shrubs	マメ科	<i>Lupinus arboreus</i>	
Shrubs	マメ科	<i>Mimosa pudica</i>	オジキソウ
Shrubs	シソ科	<i>Phlomis fryticosa</i>	
Shrubs	バラ科	<i>Potentilla fruticosa</i> 'Abbotwood'	
Shrubs	バラ科	<i>Spiraea japonica</i> 'Anthony Waterer'	シモツケ
Climbers	キンボウゲ科	<i>Clematis</i> 'Jackmanii'	
Climbers	ヒルガオ科	<i>Ipomoea indica</i>	
Climbers	ヒルガオ科	<i>Ipomoea tricolor</i> 'Heavenly Blue'	サンシキヒルガオ
Climbers	マメ科	<i>Wisteria floribunda</i> 'Alba'	フジ (品種シロバナ)
Bulbs	ユリ科	<i>Allium moly</i>	
Perennials	キツネノマゴ科	<i>Acanthus spinosus</i>	
Perennials	キク科	<i>Achillea</i> 'Moonshine'	
Perennials	シソ科	<i>Ajuga reptans</i> 'Atropurpurea'	セイヨウキランソウ
Perennials	バラ科	<i>Alchemilla mollis</i>	
Perennials	キク科	<i>Anthemis punctata</i> subsp. <i>Cupaniana</i>	
Perennials	ユリ科	<i>Aspidistra elatior</i> 'Variegata'	ハラソ
Perennials	キキョウ科	<i>Campanula glomerata</i> 'Superba'	リンドウザキカンパヌラ
Perennials	キキョウ科	<i>Campanula isophylla</i> <i>Kristal Hybrids</i> 'Stella Blue'	
Perennials	キキョウ科	<i>Campanula portenschlagiana</i>	オトメギキョウ
Perennials	カヤツリグサ科	<i>Carex elata</i> 'Aurea'	
Perennials	カヤツリグサ科	<i>Carex hechijoensis</i> 'Evergold'	
Perennials	イソマツ科	<i>Ceratostigma plumbaginoides</i>	ルリマツリモドキ
Perennials	ユリ科	<i>Convallaria majalis</i>	ドイツズラン
Perennials	ミズキ科	<i>Cornus canadensis</i>	ゴゼンタチバナ
Perennials	イネ科	<i>Cortaderia selloana</i> 'Sunningdale Silver'	パンパスグラス
Perennials	オシダ科	<i>Dryopteris filix-mas</i>	セイヨウオシダ
Perennials	バラ科	<i>Filipendula purpurea</i>	キョウカノコ
Perennials	イネ科	<i>Hakonechloa macra</i> 'Aureola'	キンウラハグサ
Perennials	ユリ科	<i>Hemerocallis</i> 'Gold Chimes'	
Perennials	ユリ科	<i>Hosta</i> 'Halcyon'	
Perennials	ユリ科	<i>Hosta</i> 'Wide Brim'	
Perennials	ユリ科	<i>Hosta undulata</i> var. <i>univittata</i>	
Perennials	アヤメ科	<i>Iris</i> 'Whiskey White'	
Perennials	アヤメ科	<i>Iris laevigata</i>	カキツバタ
Perennials	アヤメ科	<i>Iris pseudacorus</i>	キシヨウブ
Perennials	オシダ科	<i>Matteuccia struthiopteris</i>	クサソテツ
Perennials	ユリ科	<i>Ophiopogon planiscapus</i> 'Nigrescens'	オオバジャノヒゲ
Perennials	ツゲ科	<i>Pachysandra terminalis</i>	フッキソウ
Perennials	シソ科	<i>Phlomis russeliana</i>	
Perennials	バラ科	<i>Potentilla fruticosa</i> 'Elizabeth'	
Perennials	ゴマノハグサ科	<i>Verbascum dumulosum</i>	
Perennials	ゴマノハグサ科	<i>Vernica gentianoides</i>	
Perennials	ゴマノハグサ科	<i>Vernica peduncularis</i>	
Perennials	ゴマノハグサ科	<i>Veronica prostrata</i>	
Perennials	ゴマノハグサ科	<i>Veronica spicata</i> subsp. <i>incana</i>	
Perennials	イネ科	<i>Yushania anceps</i>	
Water plants	スイレン科	<i>Nymphaea</i> 'Escarboucle'	
Water plants	スイレン科	<i>Nymphaea</i> 'Gladstoneana'	
Water plants	スイレン科	<i>Nymphaea</i> 'James Brydon'	



写真10. 石組施工



写真13. サイトNo.5の完成



写真11. 英国で調達した植栽材料



写真14. サイトNo.5の完成



写真12. サイトNo.5の完成



写真15. 皇太子殿下の行啓訪問



写真16. サイトNo.5の写生風景

4) 完成

現地での反響は、大いに良好であったと各派遣デザイナーは感じていた。英国人の国民性である庭園を愛好することの好奇心なのか、すでに施工中の庭園から刺激されていた印象を受けた。各庭園が完成に近づくほど人だかりが増し、いろいろと質問をする来客者達も増えてきたのがそれを物語っていた。

平成13(2001)年5月23日に展示庭園は完成した(写真12-14)。翌日24日はRBG Kewの関連行事開会式に先立ち、「英国における日本年Japan2001」の御公務で渡英中であった日本の皇太子殿下に行啓訪問を頂き、各庭園を親しく御見学頂く事が出来た(写真15)。その後完成した庭園を一般公開した25日には、庭園を写生する市民団体がいた。これは絵画のモチーフとして庭園を受用してもらったものと考えられ、景観的に魅力ある完成度を得ることが出来たといえるであろう(写真16)。

この展示庭園は、また英国の有力紙であるタイムズ紙(THE TIMES)を初め多くのメディアに取り上げられた。6月2日掲載のタイムズ紙には「ガーデンを通しての交流は日英両国の文化交流に非常に効果的であり、両国が引き続き理解を深めることを祈念された」と記されていた(写真17)。



写真17. タイムズ紙掲載記事(2001.6.2)

5) 維持管理

完成後、日本式の庭園美を維持するためには、日本の独自の管理手法をも伝授していく必要がある。例えば、樹木の剪定は勿論のこと、日本では問題がないサイトNo.5の芝生でさえも、管理しやすい平面ではなく細かな曲面が発生してくるとRBG Kewスタッフでさえ管理が難しいと困惑していた。このように英国では日本庭園の高度な維持管理技術は難しく、今後この点を解決していくための技術交流が必要となるだろうし、その国の管理技術にあわせたデザインを考案することも必要となるだろう。

3. 海外に与える日本の伝統的庭園技術の意義

本展示庭園は、このような国際的な事業としての計画面積としては最小規模であったが、英国の都市空間ではこの規模の庭園面積が一般市民の暮らしに一番結びついたものであったため、より多くの市民の関心を得られる結果にもなった。この日本の伝統技術の再解釈となった展示庭園は、英国においても心休まる空間を提供したことを実感すると同時に、日本の伝統的庭園技術に内在する「共生」の文化を英国の一般庭園に導入できるアイデアやヒントを提供し、実体験できる機会となった。

そもそも日本庭園の起源を考えた場合、その初めに中国、朝鮮を通じて東アジア大陸伝来の庭園文化の影響があり、それが千数百年後を経た今日、日本文化として全世界に誇りうる水準にまで、その概念(思想性)、手法、技術を発展させた。この催しは、東アジア大陸から日本への庭園文化の流れの如く、日本から英国へと今後、グローバルにその国の環境・文化・生活等に育まれた庭園文化を築く先駆けの予兆とも考えられる。

また、伝統的な手法や技法を用いながらも、旧来の

様式にとらわれることなく、現在の英国の庭園に魅力と感じられる場所と時間を越えた新たなデザイン（先進的試み）は新たなビジネスチャンスとも考えられる。これは施工中、来園者から庭園設計の以来をうけた派遣デザイナーもおり、日本庭園の新たな市場開拓の可能性を秘めている。

今後の課題としては、積極的に日本の造園ビジネスを世界展開することも視野に入れた人材育成と技術展開を図る必要があるだろう。21世紀初頭の現在、欧米を中心に日本庭園ブームは実際に続いており、従来の古典的、伝統的な日本庭園の海外進出もさることながら、それを生かした現代庭園や都市公園緑地等の展開も考え、海外にも積極的に活動範囲を広げる必要を考えることも大事であろう。そして、その次世代の若い造園家の育成をかねて、彼らが活躍できる機会を作っていくことも大切と考える。

補注および引用文献

- 1) 昭和56（1981）年から昭和57（1982）年に外務省が所管する特殊法人国際交流基金（平成15〔2003〕年から独立行政法人化）がロンドンのロイヤル・アカデミー・オブ・アーツで開催（同アカデミーと共催）した「江戸大美術展」が、当時としては空前の日本文化紹介事業として世界的な話題となった。その10年後の平成3（1991）年の「ジャパンフェスティバル1991」は、英国中を日本文化で賑わし、そして、その祭典からさらに10年を経て、長い歴史を積み重ねた日英間の文化交流は21世紀に入り、平成13（2001）年の「英国における日本年Japan2001」は、新世紀における日英友好を願い、両国首脳の高い支持を受けて実施となった。
- 2) キュー植物園 (Royal Botanic Gardens, Kew) は、英国ロンドンの中心部から南西に位置するリッチモンド・アポン・テムズとキューの中間に位置する王立植物園である。その歴史は、1759年にテュークスベリーのケープル卿が熱帯植物を収集した宮殿併設の庭園に始まる。そして、ジョージ2世の長男フレデリック皇太子の未亡人であるオーガスタ妃によって拡張され、ウィリアム・チェンバーズの設計による建築群が建造された。そのうちの1つである1761年完成の中国パゴダは今でも現存している。またジョージ3世はウィリアム・エイ
- トンやサー・ジョゼフ・バンクスに命じて更に庭園の植物を豊かなものにさせた。そして1781年にジョージ3世は隣接するダッチ・ハウスを買い上げて皇室の子供達の育児施設とした。この建物は現在でもキュー宮殿として残されている。1840年に庭園は国立植物園として改組され、そしてウィリアム・ジャクソン・フッカーの指揮のもとで植物園は30haにまで拡張され、更にその後の改修で現在の121ha（300acre）の園地として完成した。今では世界各地から集められた3万種以上もの植物がここで管理され、世界中から多くの園芸研究者や専門家が研究に訪れている。また2003年にユネスコ世界遺産に登録された。
- 3) 「英国における日本年Japan2001」英国側実行委員会委員長を当時務めていたブレイクナム卿が、同時に理事長を務められていたRBG Kewにおいて実施された「日本の伝統的庭園技術を用いた今日の庭園展示 “Past Traditions Tomorrow's Designs”」は、国際交流基金、大和日英基金からの助成を受けて実施となった。また、現在でもRBG Kewのホームページ〈<http://www.kew.org/press/archive/japan2001.html>〉に Past Traditions: Tomorrow's Designsと題して掲載されている。2009.9.13参照
- 4) 井上忠佳（2001）庭141号，建築資料研究社，pp.144-148.
- 5) 応募資格は、造園の設計・施工監理の実績（日本庭園に限定しない）を有する若手・中堅（60歳未満）のデザイナーであった。選定については、単なる海外での庭園設計の技術力だけではなく、特に設計監理能力が強く求められた。
- 6) 他にも滝組程度の小規模な地形の造成は可能であるが、原則として造成は行わないこと（「都市住宅」タイプは敷地的にも当然無理と考えられる）等の条件提示もなされた。
- 7) 関西剛康（2006）枯山水の景観構成にみる山水画の影響に関する一考察，ランドスケープ研究 69（5）：687-690.
- 8) 英国王立園芸協会（The Royal Horticultural Society）監修／クリストファー・ブリッケル責任編集／塚本洋太郎監訳（2001）新・花と植物百科（New Encyclopedia of Plants and Flowers），同朋舎／角川書店。